



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 2921 号 2016.3.21 発行

### 社説：児童福祉法改正 子の救済は待ったなし

中日新聞 2016年3月21日

児童虐待の急増に対応するため、厚生労働省の有識者会議は児童相談所の機能強化を柱とする報告書をまとめた。報告を基に児童福祉法改正案を提出する。子どもを救う体制の強化は待ったなしだ。目を覆いたくなるような子どもの虐待死事件は後を絶たない。

東京都足立区で、三歳の次男をウサギ飼育用のケージに長期にわたって閉じ込め窒息死させたとして、地裁は今月中旬、両親に実刑判決を言い渡した。

大田区では一月、暴力団員で大柄な男が、交際相手の三歳の長男を一時間半も殴る、蹴る、投げ飛ばすなどの暴行を加え死なせた。

厚労省によると児童虐待件数は増え続けており、二〇一四年度は過去最悪の八万九千件に上った。ここ十五年で件数は七・六倍になっているが、虐待対応の中心となる児童相談所（児相）の児童福祉司の人数は、二・三倍にとどまる。職員の平均受け持ち件数は年間百件を超えともいわれており、厚労省の担当者でさえ「児相はパンク状態」と認める。

有識者会議の報告書は、児相の負担を軽減するため、児相の業務を子どもの一時保護など深刻な虐待対応に重点化。市区町村に新たな支援拠点を設け、これまで児相が担ってきた虐待通報を受けても一時保護に至らなかった子どもや、施設などから家庭に戻った子どもの支援は、市区町村が行うよう求めた。子育てに関する相談などの業務も自治体に移す。

過去の虐待死事件では、児相が関与していながらその後のフォローがなく、悲劇が防げなかったケースは多い。その反省を踏まえたものだ。

加えて、職員の専門性を高めるため、児童福祉司の研修を義務化することや、一時保護や施設への入所など法的強制力を伴う対応を強化するため、弁護士のサポート体制確立を提起した。

児童福祉司の配置基準を見直し、手厚くすることも盛り込んだ。現行は人口四万～七万人に一人と、国際的な水準から見ても低い。大幅な拡充が必要だ。

また、現在は都道府県、政令指定都市にのみ設置が義務付けられている児相を、東京二十三区でも設置できるよう認め、設置が進んでいない人口二十万人以上の中核市にも促した。虐待増加の背景には、貧困の拡大や家庭が地域で孤立化しているなどの問題も指摘される。児相の体制強化とともに社会全体のひずみを是正することも求められる。

### 論説：自殺対策法10年、改正へ 自治体にも支援策を課す

福井新聞 2016年3月20日

「自殺対策基本法」施行10年を機に、超党派議員連盟がまとめた改正法案が今国会で成立の見通しで、4月に施行される。国だけに課していた自殺対策計画の策定を全ての都道府県と市町村にも義務付ける。国は失業や多重債務などの自殺要因を踏まえた総合計画を立て、自治体は地域の自殺実態を分析・反映した対策を練る。これまでの取り組みを緩めず、より効果的な手法が注目される。

改正法のもう一つの特徴が、子どもの自殺防止に向け学校、保護者、地域の3者協力態

勢を一層強化するよう促した点である。いじめ、不登校、親との離別など学校、家庭での経験に起因する青少年の自殺が依然として後を絶たず、教育現場に密着した対策が急がれる。

#### ■具体的な肉付けが鍵■

今回の改正案をみる限り新味には乏しい。自殺の恐れがある人に精神医療の提供体制を整えたり、医師や専門家、民間団体との連携確保を求めたりしているが、本県を含め既に多くの都道府県が実施済みだ。子どもの自殺対策も、学校の相談体制や教員の研修機会の充実、児童生徒への指導を学校中心に3者が連携するなど目新しくはない。

改正案は、従来の対策に自治体がより細やかで具体的にどう肉付けするかを狙ったものだろう。中では、いじめや悩みを一人で抱え込まないよう「SOSの出し方」を教える実践的な指導などは期待できそうだ。子どもたちには分かりやすい処方箋が大切である。

自殺者が多い中高年男性の場合、特に失業者では借金やうつ病、アルコール中毒など自殺要因を複合的に抱えていることが多く、医療面のアプローチにとどまらず福祉、法律分野へとつなげるケアは不可欠である。

#### ■全国的に底上げ必要■

内閣府自殺対策室は先進53事例をウェブに掲載している。県内では、池田町「こころの健康づくり事業」、坂井市の東尋坊でNPO法人「心に響く文集・編集局」などが人命救助に努める「自殺企図者保護事業」、鯖江市職員が市民と協働する「鯖江流 生きる支援ネットワーク事業」が紹介されている。

また、窓口でのチェックシート事業や人が頻繁に出入りするトイレを啓発媒体にして効果を上げている「若狭地域自殺対策連絡協議会」の取り組みなど、各地で進められている自殺防止へのユニークな活動は全国で共有していい。

NPO法人「自殺対策支援センター ライフリンク」の清水康之代表は「総合相談・研修会をはじめ先進的な取り組みを全国に広げ、自殺対策の底上げを図っていくべきだ」という。

#### ■人ごとと片付けずに■

自殺者数は1998年3万人台を超えて後、14年間にわたり大台を続けた。2012年から2万人台半ばで推移している。

県内は14年が145人で前年比19人減、15年12月までの暫定値は122人と減少傾向にあり（警察庁集計）、減少率は全国上位にある。

だが、減っているからと安心できない問題である。依然として数値は高い。ひたすら対策を続けることが大切になる。日本の自殺率25・6%は先進7カ国で最も高い（14年度白書）。特に若年層（15～34歳）は死因の1位を占める深刻な状況で若者対策は急務だ。こうした傾向をくんで、自殺総合対策大綱も見直されるようだ。

3月は「自殺対策強化月間」。統計で1年のうち最も自殺者が多いことから、12年の大綱で定められた。「追い込まれた末の死」で、防ぐことができる社会問題と定義される。人ごとと片付けてしまわず、一人一人が関心を深めれば社会全体の取り組みへと膨らむ。

### <社説> 貧困対策本格化 県民で取り組みを支えたい 琉球新報 2016年3月21日

県内26市町村が2016年度に子どもの貧困対策支援員やスクールソーシャルワーカーなどの支援員を新たに100人以上配置する。さらに「子どもの居場所づくり」の事業を23市町村が始める。子どもの貧困対策の取り組みが本格化することを歓迎したい。

こうした取り組みを開始する市町村のほとんどは内閣府が16年度に計上した沖縄子供の貧困緊急対策事業10億円を活用している。ことし1月から市町村に事業が説明され、この1～2カ月で一斉にメニューに加えられた。

同事業は深刻な県内の子どもの貧困対策という緊急性、重要性から早急に準備が進められたものだ。しかし琉球新報が実施した市町村アンケートでは自治体から「一時的なブー

ムに終わらせないで」との意見が上がっている。緊急対策として一過性のものにせず、長期的な対策を進める必要がある。

100人を超える支援員が新たに配置されることは歓迎すべきだが、市町村によって人数にばらつきがあるほか、人材確保や技術向上などさまざまな課題も浮かぶ。

スクールソーシャルワーカーの採用で、自治体の中には社会福祉士や教員免許などの有資格者を条件にしているところもある。こうした条件を付けた場合、小規模町村だと対象となる人材を確保することが困難になる。このため子ども支援の経験者などに間口を広げ、さらに研修制度の実施を求める声が自治体から出ている。政府はスクールソーシャルワーカーを19年度までに全ての中学校区に1人配置することを目指している。財政、制度面などで支援し、自治体によって格差が出ないようにしてほしい。

県ひとり親世帯等実態調査で、就労していない母子世帯の母親の40・7%が自身の病気や障がい理由を働けないと回答した。自己責任では解決できない深刻な実態がある。それなのに宮古島市議会で先日、市議の一人が子どもの貧困対策について「やり過ぎだ」と批判した。「子どもは貧困でこそ向上心を持って進歩する。親がどうにかするべきだ」と述べた。現状認識を踏まえない暴言と言わざるを得ない。

県が素案をまとめた「子どもの貧困対策推進計画」では「子どもの貧困は自己責任論ではなく、社会全体の問題」と位置付けた。自治体の事業本格始動を機に、県民全体で取り組みを支えたい。



#### 「ダウン症」診断 育て方「情報ほしい」

茨城新聞 2016年3月20日

健太ちゃんを抱っこする舞さん=水戸市元吉田町

水戸市の舞さん(28)=仮名=は2014年8月、待望の第1子、健太ちゃん(1)=仮名=を産んだ。

出産直後、舞さんは、健太ちゃんに染色体異常の可能性があり精密検査をする、と医師から告げられた。健太ちゃんは生後10日目には肺動脈から大動脈につながる動脈管を閉じる手術を受けた。

約2週間後、検査結果が出た。診断は「ダウン

症」だった。

ダウン症は染色体異常により0・1%の割合で出生し、ダウン症児の約40%に先天性心奇形や慢性鼻炎などの合併症状が見られる。

健太ちゃんには診断後間もなく、鼻から胃へチューブを通して栄養を投与する「経管栄養」の措置が取られた。食べた物が誤って気管に入り肺炎を引き起こす恐れがあるためだ。

舞さんも健太ちゃんの退院に備え、経管栄養のやり方を慣れないながらも懸命に覚えた。健太ちゃんにとっては「食べる」という行為も当たり前ではないのだ、と思い知らされた。

「健太をこの先どう育てていったらいいのか」

舞さんの周りにダウン症の子どもを持つ母親は誰もいない。

「情報がほしい」

舞さんは病院の待合室で、ダウン症の子ども姿を見掛けると、臆せず、その母親に声を掛け続けた。

そんな中、一人の母親から紹介されたのが「いちご教室」(同市・愛正会記念茨城福祉医療センター)だった。

障害のある子どもの出生や子育てに不安、戸惑いを覚える人は少なくないが、そうした子どもを支える早期療育は県内でも着実に広がりつつある。

## 虐待死の可能性、国集計の3～5倍 小児科学会が初推計 山田佳奈

朝日新聞 2016年3月21日

日本小児科学会は年間約350人の子どもが虐待で亡くなった可能性があるとの推計を初めてまとめた。2011～13年度の厚生労働省の集計では年69～99人（無理心中含む）で、その3～5倍になる。厚労省は自治体の報告を基に虐待死を集計しているが、同学会は「虐待死が見逃されている恐れがある」と指摘する。

防げる可能性のある子どもの死を分析するため、同学会の子どもの死亡登録・検証委員会が調査した。

同委の小児科医が活動する東京都、群馬県、京都府、北九州市の4自治体で、11年に死亡した15歳未満の子ども（東京は5歳未満のみ）368人を分析した。全国で亡くなった15歳未満の子ども約5千人の約7%にあたる。

医療機関に調査用紙を送り、死亡診断書では把握できない詳細について尋ね、一部は聞き取りも行った。

その結果、全体の7.3%にあたる27人について「虐待で亡くなった可能性がある」と判断した。この割合を全国規模で換算すると約350人となった。

## ユニークな焼き菓子人気 朝来の障害者施設で製造 チュイルの生地をスプーンで薄く伸ばす作業＝朝来市、第2和生園

神戸新聞 2016年3月20日

兵庫県朝来市和田山町竹田の障害者就労施設「第2和生園」の利用者が、焼き菓子の製造に励んでいる。湯葉を焼いた「ゆばチップス」や塩味のきいたパイ生地で石垣をイメージした「竹田城跡 石垣パイ」などユニークな新商品も開発している。

同施設は2014年9月にオープン。焼き菓子製造は、企業などへの就職が難しい人に職場を提供する「就労継続支援B型事業」の利用者6人が中心となり、生地作りから袋詰めまでをこなしている。



## 「ダウン症」で生まれた子どもは不幸ですか？ 世界ダウン症の日に考えたいひとつのこと

東洋経済 2016年03月21日

姫路 まさのり:放送作家・ライター 姫路 まさのり 放送作家・ライター 放送作家・ライター。1980年、三重県尾鷲市出身。二人の娘の父。HIV・AIDS、ダウン症、発達障害などの啓発・支援事業に関わり、2014年、ABCラジオの番組『ダウン症は不幸ですか?』で、日本民間



放送連盟賞、ラジオ報道番組部門最優秀賞を受賞。写真は取材した佐々木ジェイミー君と。知られていない事実も多いダウン症の実際をレポートします（写真は佐々木サミュエルズ・スティーブンさんご家族）

3月21日が「世界ダウン症の日」ということを知っている人は、どれくらいいるのでしょうか。新型出生前診断開始でも注目を集めたダウン症の問題ですが、意外と知られていない事実が多

いのです。

ABCラジオの番組でダウン症を取り上げ、日本民間放送連盟賞を受賞。『ダウン症って不幸ですか?』（宝島社）の著書も著した姫路まさのり氏が、知られざるダウン症の実情について語ります。

## ダウン症について、どこまで知っていますか？

3月21日は、「世界ダウン症の日」です。これは、2012年に国連が定めた国際デーで、なぜ3月21日かという、ダウン症は、「21番目の染色体」が「3本」あることが、主な発症要因のため、この日に設定されました。

通常であれば、2本で1組の染色体が、ダウン症の人は1本多くて「3本」ある。言い換えれば、たったそれだけが、私たちとダウン症の人たちの「違い」なのです。

ダウン症は、決して珍しい障害ではありません。しかし、なんとなくその名称を知っていても、詳しくは知らない人が多いのではないのでしょうか？

例えば、ダウン症の「ダウン」はアップ・ダウンの「ダウン」ではありません。「ダウン（下の方向という意）」との勘違いから、マイナスなイメージをお持ちの方も多いと思いますが、発見者であるイギリスの医師、ラングトン・H・ダウン氏にちなんでつけられました。

ダウン症の人たちは、釣り目がちでみなよく似た顔つきなのは、顔の中心部の骨がゆっくり発達するのに対し、周囲は、通常で発達するため、皮膚が外側に引っ張られてしまうからです。

「短命」というイメージをお持ちの方も、いらっしゃるかもしれません。これは、ダウン症児の半数近くが、心臓疾患の合併症を抱えて生まれるため、幼い頃に亡くなってしまいう場合も多いことに起因しています。

しかし現在は、心臓手術や消化器の疾患も含めた、医療の進歩がめまぐるしく、ダウン症の人の平均寿命は、健常者と変わらないところまで達しています。

補足すると、ダウン症の人が短命といわれた背景には、もうひとつの理由があります。ある親御さんは、ダウン症の子どもを授かった際に、医師からはっきりと、宣告されたそうです。

「この子は長く生きて税金を払いませんから、積極的な治療はしません」

その昔、障害を持つ子どもが生まれれば、蔵に閉じ込めておくようなことも珍しくありませんでした。同時に「親戚の手前もありますので、なかったことに……」という親の思惑も表裏一体。「短命」という情報が漏れ伝わったのには、「短命であるほうが助かる」という、ダウン症の赤ちゃんにとって言葉にしがたい、悲しい現実が存在していたからです。

## ダウン症の子はいらない？ 新型出生前診断の波紋

医療の進歩、そして時代の変化とともに、ようやく、「長く生きられるようになった」ダウン症の人たち。現在、日本でも、年間1200人ほどのダウン症の赤ちゃんが生まれていると推定されています。

ちなみに、ダウン症の子どもが生まれる確率は、「約1/1000」といわれますが、これは母親が20歳代前半の場合の確率です。30歳代半ばであれば、約1/300。40歳代の場合であれば、約1/90と、母親の年齢が上がれば、確率も上がっていきます。高齢出産化が進んでいる昨今、同時にダウン症の子どもの出生も増えていくと考えられています。

しかし、2013年。ダウン症の人やご家族にとって、衝撃的なニュースが駆け巡りました。「新型出生前診断」の開始です。

妊娠10週以上の母体から20mLの血液を採取するだけで、胎児の染色体異常の有無を、高精度に判別することが可能になったのです。

本来の目的は、早期に異常を発見し、生まれくる小さな命が生きる“道すじ”を、くっきりと照らしてあげるためのものでした。

しかし、新聞やニュースでは「検査でダウン症かどうかを判別できる」という部分のみがクローズアップされ、結果、染色体異常が判明したご家族の9割以上が、「中絶」を選択。2年間で223人が中絶し、妊娠を継続した人は、わずか4人でした。

## 「お母さん、私、生まれてこなくてよかったの？」

報道を見聞きするたび、ダウン症とともに生きてこられたご家族は「人生を否定された」「自分達が不幸の象徴になっているようだ」と、悲しみにくれました。

あるダウン症の子どもは、お母さんにこう聞いたそうです。

「お母さん、私、生まれてこなくてよかったの？ 私、いらないの？」

残念ながら、ダウン症については、芸術に秀でた人の活躍などステレオタイプな報道が多く、“フツー”に暮らすご家族の様子については、あまり知られていないのが現状です。



筆者と取材させて頂いた佐々木ジェイミー君

ダウン症の子どもは、成長が とてもゆっくりです。「歩く」や「言葉話す」なども、1~2年以上、遅れてできるようになるケースがほとんど。とはいえ、決して成長しないわけではなく、遅れてやってきた分、できるようになったときの喜びも倍増です。

言い換えれば、まわりの子どもと自分の子どもとを、見比べることなく、自分の子どもの成長を、しっかりと、見つめることができます。

真っ直ぐな心の子どもと過ごすうちに、「自分自身が真人間になれた」。

そう語る親御さんも少なくありません。

ある親御さんは、このようにおっしゃいました。

「まわりの人が気を遣って“自分たち親子なら育ててくれると思って、神様が授けてくれたんだよ”という話をされますが、全然違うように思うんです。逆に、神様が、僕たち夫婦の『弱い面を助ける』ために、授けてくれたんじゃないかなって。『ダウン症の子どもを育ててごらん？ きっと、考え方が変わるよというメッセージ』だと受け止めています」

人間は誰も、おぎゃ〜という泣き声とともに、無限の可能性を背負った赤ちゃんとして、この世に生まれてきます。けれども、親はいつしか、「この子は これには向いてない」、「あれは ちょっとできないだろう」と、その特性を見極めているつもりが、子どもの可能性を、知らず知らず狭めていってしまいます。

しかし、ダウン症のご家族は、「あれもできた、これもできた。挑戦してみたら…意外とできるやん！」と、その可能性を広げながら人生を、ゆっくりと生きていきます。

それは、心の収穫が多い人生であり、尊く、ある意味、何よりも人間らしいとさえ感じられるほどです。

自分だったら…大切なのは「想像力」

今年4月から、「障害者差別解消法」という法律が施行されますが、ダウン症に限らず、障害者への支援については、「思いやり」や「優しさ」で語られることが少なくありません。

しかし、それ以前に大切なのは、何より「想像力」ではないでしょうか？

子どもでも、両親でも、恋人でも、お孫さんでも構いません。もしも、もしも、自分の大切な人から、

「わたし、生まれてこなくてよかったの？ わたし、いらないの？」

そう問われたなら……あなたは、どんな感情を抱きますか？

1分間で、かまわないんです。真剣に想像してみてください。

その時、胸にこみ上げてきた「苦しさ」、「つらさ」、そして「悔しさ」が、ダウン症の人たちへの「優しさ」に変わるはずですよ。

3月21日「世界ダウン症の日」の目的は、「ダウン症について広く知ってもらうこと」です。

人間は、知らないものに恐怖を覚えます。ダウン症についても、知らないから、怖さを覚えたり、時に、「かわいそう……」と推し量ってしまうことがあるのだと思います。

当然ながら、「平凡なダウン症の家庭」は、あなたの街に、あなたの隣に存在しています。私たちと同じように、今日も、笑って、泣いて、怒って暮らしているのです。



どうか、「生きたい……」と願う小さな命を、ダウン症を理由にして諦めないでください。ダウン症は決して不幸ではありません。私が取材を通じて、そう強く感じた現実を、より多くの方々に知っていただきたいと思います。



『親子でうたい継ぐ 子守唄のえほん』西館好子著・構成

産経新聞 2016年3月20日

『親子でうたい継ぐ 子守唄のえほん』

子守唄を知らない、わが子に歌ってあげられない若いママが増えている。著者であるNPO法人「日本子守唄協会」の西館好子理事長はそれが残念でならない。

わが子を胸に抱いて、しっかり目を見つめながら子守唄を歌うと、お母さん自身が温かい気持ちになれる。育児や家事に追われ、忙しさのあまりささくれ立った心が落ち着くという。そうなれば虐待も育児ノイローゼ、ネグレクト（放棄）も減るに違いない。

本書は「入門者ママ」向き。代表的な全国の子守唄・童謡22曲がかわいらしい絵本になった。CD付き。親子一緒に楽しめる。（チャイルド本社・1667円＋税）

〔顔〕 親子3代の学習障害を本にした松本さん

読売新聞 2016年03月21日

松本 三枝子さん（39）

撮影・沼田光太郎



長男（13）が小学6年だった2014年12月、発達障害の一つである学習障害（LD）と診断された。

知的発達の遅れはないが、読み書きが十分にできず、九九も覚えられない。自分と父（73）も同じだった。「不便だったものは、これなんだ」と心が軽くなった。

進学先の中学校に宛てて、長男や自分、父が悩んだ経験を文章にまとめた。「あ」「お」といった丸みのある文字が判別できない、「客」は分かるが、2文字からなる「額」は混乱する……。小学校の特別指導の教諭に見せたところ、出版を勧められた。「恥ずかしがってばかりでは、分かってもらえない」と執筆に挑んだ。

原稿は手書き。漢字は、平仮名をスマートフォンで変換して書き写した。昨年12月に出した本の題名は「学習障害三代おそろい」。父が勤務先に出す書類を、姉が代筆していたこともつづった。

支えがあれば、周りと同じ生活ができることは実体験で分かっている。「少しでもLDのことを知ってもらい、子どもたちが生きやすい時代になってほしい」と願う。（千葉支局 佐藤純）

評・稲泉連（ノンフィクションライター）

『小倉昌男 祈りと経営』 森健著

読売新聞 2016年03月21日

心をこめつづった評伝

最後の頁をそっと閉じたとき、思わず深いため息をついた。

小倉昌男とはこういう人だったのか——そんな驚きとともに、人生というものただならぬ機微に触れた気持ちになったからだ。

ヤマト運輸の「宅急便の父」であり、日本を代表する名経営者の一人。宅配事業をめぐる国の規制と戦った反骨の人でもある。ロングセ



ラーとなった自著『小倉昌男 経営学』は、今ではビジネス書の現代の古典だろう。

だが、その彼にはこれまでほとんど語られてこなかった謎がある、と著者は言う。それは経営の現場を退いた小倉がなぜ、巨額の私財をなげうってまでスワンパーカーリーなどの福祉事業を手掛けたのか、というものだ。その謎に焦点を当てて取材を進める著者は、そこに夫として、そして父として苦悩する彼のもう一つの真実があったことを知り、世間に流布したものは全く別の姿を浮かび上がらせていく。

それがどのような問題に対する苦悩であったかは、本書の文脈と丁寧な謎解きに沿って理解されるべきものだろう。

その上で印象的だったのは、等身大の小倉を描こうという著者の試みを、取材に応じた関係者たちが次第に強く支えていった様子が窺えることだった。

側近の社員や親交のあった人たち、妻を亡くした後に小倉を支えた女性、さらには彼の葛藤の中心にあった家族……。彼ら一人ひとりが本当の小倉はこうだった、本当の父はこのように人だったと語るとき、そこに何とも言えないそれぞれの愛情が滲むのである。それはまるで経営者として神格化された小倉を、自分たちの側に取り戻そうとする静かな戦いのようにも感じられた。

その思いに応え、彼らの信頼を裏切らない真摯な取材姿勢に説得力がある。心のこもったあたたかい人物評伝だ。

◇もり・けん＝1968年、東京都生まれ。ジャーナリスト。著書に『「つなみ」の子もたち』など。

小学館 1600円

#### 埼玉)よりそった5年間 立教大が復興支援活動を本に 平井茂雄



朝日新聞 2016年3月21日  
気仙沼大島の小学生とレクリエーションを楽しむ立教大生ら＝立教大コミュニティ福祉学部東日本大震災復興支援推進室提供

東日本大震災の被災地などで復興支援に取り組んでいる立教大学コミュニティ福祉学部(新座市)の東日本大震災復興支援推進室が、活動内容をまとめた「復興支援ってなんだろう? 人とコミュニティによりそった5年間」を出版した。被災者との「交流」に重点を置いた活動を紹介している。



同学部は震災直後の2011年4月、東日本大震災復興支援プロジェクト(委員長＝森本佳樹・同学部教授)を設置。被災者の心のケアなど、ソフト面を中心に5年から10年間を目標に支援を実施している。岩手や宮城、福島、東京都内の計7カ所を

拠点に、今年2月までに計230回、延べ約2900人が参加している。

森本教授は「支援に行くというより、被災者と遊んだり話したりという『交流』を重ねた結果が、被災地や避難先での新たなコミュニティづくりにつながっている」と話す。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も  
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

